

令和 4 年 6 月 23 日現在

機関番号：13101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2021

課題番号：16K02564

研究課題名(和文) 顔と身体の統御 ロシアにおける記号論の二つのパラダイムに関する研究

研究課題名(英文) Faciality and the control of the body: Two paradigms of semiotics in Russia

研究代表者

番場 俊 (Bamba, Satoshi)

新潟大学・人文社会科学系・教授

研究者番号：90303099

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、20世紀初めのロシアにおける記号をめぐる思考のうちに複数の異なった潮流を認めることを試みた。バフチンとヴィゴツキーの記号論の差異は、「顔の現象学」と「身体の統御」という異なる文化的パラダイムの対立として理解することができる。ドストエフスキーの作品から最大のインスピレーションを得ているバフチンの対話主義は、19世紀における「顔」をめぐる想像力の変容という文脈で捉えなおすことができる。情動的記号に関するヴィゴツキーのアイデアは、同時代の生理学やアヴァンギャルド芸術と共鳴しつつ、近年、文化理論における「情動論的転回 Affective Turn」と呼ばれているものに大きく寄与する。

研究成果の学術的意義や社会的意義

20世紀初めのロシアにおける記号をめぐる思考は、おおむねその後の西洋における構造主義や記号論の展開の歴史として理解されているが、それにとどまらず、「情動論的転回」と呼ばれる今日的な思想課題にとっても大きなインパクトをもっている。本研究はまた、バフチンとヴィゴツキーの差異に積極的に注目することで、単線的で平板な文化史理解に異議を唱えようとするものでもある。記号に関する理論的検討は、ドストエフスキーをはじめとする文学作品や芸術作品の検討とあわせておこなわれており、文化史に対する学際的なアプローチの有効性を証明することにもつながっている。

研究成果の概要(英文)：This study has attempted to recognize different trends in the Russian thought about signs in the early 20th century. The difference between Bakhtin's and Vigotsky's semiotics can be understood as an opposition between conflicting cultural paradigms of the "phenomenology of the face" and the "control of the body." The dialogism in Bakhtin, which has derived the greatest inspiration from the works of Dostoevsky, can be reinterpreted in the context of the transformation of the imagination about the "face" in the 19th century. And Vigotsky's idea of the affective sign, resonating with contemporary physiology and avant-garde art, makes a great contribution to what is called the "affective turn" in cultural theory in recent years.

研究分野：ロシア文学・表象文化論

キーワード：記号 バフチン ヴィゴツキー ドストエフスキー

### 1. 研究開始当初の背景

ロシアにおける記号論の展開は、これまで、ヤコブソンやトゥイニャーノフに代表される構造主義の先駆としてのフォルマリズムの潮流に、発話主体の社会的相互作用を強調するバフチンの対話主義を対置するかたちで整理されてきた。だが、このような理解は、20世紀初めのロシア記号論に潜伏していたもう一つの対立を覆い隠してしまう。すなわち、対面状況にある「私」と「他者」の対話から出発する思想家バフチンの「顔の現象学」と、人とモノの関係から出発し、記号を人間が自らの行動をコントロールするために作りだした手段とみなす心理学者ヴィゴツキーの「身体統御の記号論」の対立である。

記号論と顔の関係についていえば、記号の解釈という観念の起源が、「他者の顔を読む」19世紀都市の観相学的実践のうちにあったことはつとに指摘されており (Sennett, *The Fall of Public Man*, 1974) バフチンの思想的源泉であったドストエフスキーの小説に観相学が与えた影響についても研究があるが (Rice, *Dostoevsky and the Healing Art*, 1985) ダーウィンの表情論や写真メディアの普及と同時期のドストエフスキーの小説には、ラファター以来の伝統的な観相学では理解できないところがある。20世紀前半に観相学を復活させ、ドストエフスキーの『白痴』に関する特異な解釈を提示したエイゼンシテインは、こうした問題を理解するための展望を与えてくれるように思われる (「映画形式」1934年、「ミザンセーヌの問題によせて」1948年ほか)。

記号は「人間が行動を統御 (овладение, mastery) するために作りだした手段」であるというヴィゴツキーの定義 (『高次精神機能の発達史』1930-31年) の意義を再考するきっかけとなったのは、従来「管理社会」と訳されてきたドゥルーズの “les sociétés de contrôle” を「制御社会」と読みかえ、チューリング・マシンから今日の脳科学にいたる「制御」概念の遍在を論じた北野圭介の『制御と社会』(2014年) ドストエフスキーの小説における身体の無意識的共振を論じたポドロガの著作 (『ミメシス』第1巻、2006年ほか) 記号論の主知主義的傾向を、ヴィゴツキーも傾倒していたスピノザの再評価によってのりこえようとする「情動論的転回」と呼ばれる現代思想の動向である (伊藤守『情動の権力』2013年ほか)。

### 2. 研究の目的

本研究は、20世紀初めのロシアにおける「記号」をめぐる思考のうちに複数の異なった潮流を認め、とりわけバフチンとヴィゴツキーの記号論の差異を、「顔の現象学」と「身体統御」という異なる身体的・文化的パラダイムの対立として理解することを試みたものである。具体的には、(1)これまで見過ごされてきたバフチンとヴィゴツキーの思想的対立を明らかにすること、(2)前者の系譜を19世紀における「顔」の想像力の変容のうちに探ること、(3)後者の記号観が同時代のアヴァンギャルド芸術論と多くの共通点をもっていたことを明らかにすること、(4)以上の考察をふまえ、「情動論的転回 Affective Turn」と呼ばれる現代思想の課題にとって、ロシア記号論がもつ意義を考察することを目的とした。

### 3. 研究の方法

上述の課題をすすめるために、本研究では以下の四項目に沿って検討を進めた (全体の構造については図1参照)。

(1)バフチンとヴィゴツキーの記号概念を比較し、とりわけ、「統御=支配=習得」と多義的に理解しうるヴィゴツキーの“овладение”概念に注目することによって、両者が拠って立つ身体的・文化的パラダイムの差異を明らかにする。

(2)向かいあう「私」と「他者」という現象学的状況から出発するバフチンの哲学的人間学を、ロシアにおける観相学的実践の変容の帰結の一つとして位置づける。

(3)ヴィゴツキーと同時代のアヴァンギャルド芸術論の文化史的コンテクストを探ることによって、両者がともに「身体統御」というパラダイムに依拠していたことを明らかにする。

(4)ポドロガのミメシス論や、今日「情動論的転回」と呼ばれている思想潮流を参照しながら、ロシア記号論の現代的意義を検討する。

### 4. 研究成果

上記(1)(2)を中心に、それからの発展といえる(3)(4)もまじえて、すべての項目で成果を出すことを目的として研究は進められたが、結果は偏りが目立つものになってしまった。とりわけ(1)に関しては、『情動に関する学説』(1931-33年)において、ヴィゴツキーが情動のジューム

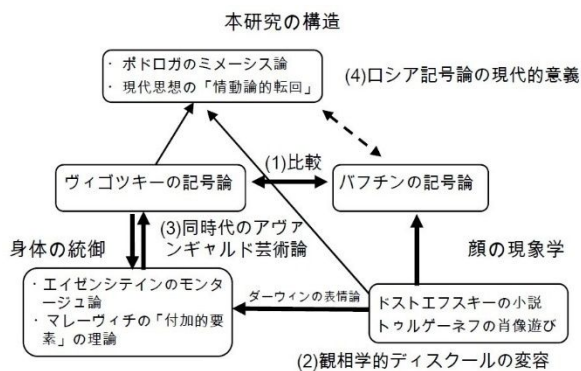


図 1

ズ＝ランゲ説をはじめとする先行研究に対する批判のなかで暗示的に示しているようにみえる身体論と、彼が『言語と思考』（1934年）や「子どもの発達における道具と記号」（1930年）といった他の著作で展開していた記号論の関係づけに難渋し、十分な成果をあげることができたとはいえない。

以下、各項目について述べる。

(1)本研究のもっとも重要な課題は、これまで、やや安易に共通性が前提とされてきたヴィゴツキーとバフチンの記号観の差異を明らかにすることである。そのためには、両者の記号観の原光景ともいうべき状況を比較するのがよい。記号に関する彼の思考の最良のモデルは、おそらく、ピュリダンのろばの状況に置かれた人間である（『高次精神機能の発達史』、著作集第三巻、65頁以降）。哲学者ピュリダンのものとされている哲学的アネクドートによれば、等距離に同質同量の二つの乾草の束を置かれた空腹のろばは、自らに働きかけるまったく等しい二つの刺激の間で選択することができず餓死する。だが、刺激 反応の枠組みで完全に行動が決定されるろばと異なり、ピュリダンのろばの位置に置かれた人間はくじを引き、与えられた刺激 反応の状況のなかに補助的な刺激手段を作り出すことによって、自らの行動を統御しようとする。このくじが記号の起源であって、ヴィゴツキーの定義によれば、「人間によって人為的に作り出され、行動を支配する手段 他人の行動であれ自分の行動であれ になるあらゆる条件刺激は記号である」（同書、78頁）。バフチンもまた、ヴィゴツキーと同じく、20世紀の構造言語学の出発点となったラングとパロールの区別や、シニフィアンとシニフィエの結合としての記号といった概念とは一切無縁なところで記号論を構想しているが、彼の記号観の原光景はヴィゴツキーとはまったく異なる。ドストエフスキー論の増補改訂版（1963年）において、自らの言語観を明確にしようとするバフチンは、対話する二人の主体によってくり返された同一の発話「人生は素晴らしい」「人生は素晴らしい」のあいだに不可避免的に生じる評価的アクセントの差異に注目している（『ドストエフスキーの詩学の諸問題』第5章）。バフチンは同一の記号における声の交錯から出発する。彼の言語観は深く人称的（личный）であり、その対話論において声は向かい合う二人の顔（лицо）から発しているのであって、「純粹で無人称的な心理」の研究（『芸術心理学』第二版、17頁）から出発しようとしたヴィゴツキーとのあいだの対立にこそ注目しなければならない。

この基本的アイデアをもとに、別の研究課題（基盤研究(B) 19H01243「ロシア・旧ソ連文化におけるメロドラマ的想像力の総合的研究」）とあわせて、メロドラマ的想像力における記号の類型に関する検討結果を国際学会で発表した。

(2)の研究課題は、本研究においてもっとも大きな成果を挙げることができたものであり、単著『顔の世紀』の果てに「ドストエフスキー『白痴』を読み直す」現代書館、2019年を刊行した。そこでは、ドストエフスキーの小説『白痴』が、「バフチンが「グロテスク・リアリズム」と呼ぶ前 顔貌的体制に属するゴゴリのテクストとの比較、18世紀末～19世紀後半の西洋観相学の変容という文化史的コンテクスト、美術館、写真、映画といったメディア・テクノロジーとの関係といった観点から分析されている。そこで検討された論点から主要なものを挙げれば、においては、ゴゴリとドストエフスキーを身体の「ミメーシス」という観点から再評価したヴァレリー・ポドロガの業績の重要性を明らかにした。においては、作家トゥルゲーネフがヴィアルドー夫人のサロンで友人たちと興じた「肖像ゲーム」が、記号の歴史においてもった意義を明らかにするとともに、『白痴』のエピローグにおいて再び狂気の淵に沈んだムイシキン公爵の顔を指さすエパンチン將軍夫人の身振りが、小説全体の主題を要約するものであることを示した（この研究成果を発展させたものを、第17回国際ドストエフスキー学会シンポジウムにおいて発表している）。においては、ドストエフスキーの美術館経験（バーゼルの美術館におけるホルバインの死せるキリスト、ドレスデンの美術館におけるラファエッロの聖母）が、いずれも、映画以前における「クローズアップ」の顔という問題の所在を如実に示すものであることが明らかになった。

(3)の研究課題における成果は、ヴィゴツキーの内言論から大きな影響を受ける一方、顔に関する議論においてはバフチンと著しい対比を見せていたエイゼンシュテインをテーマとして開催した研究会である（「セルゲイ×ウォルト×ユーリー フレームの彼方にあるもの」2018年5月19日、新潟大学駅南キャンパスときめいと講義室B）。アニメーション研究のキム・ジュニアン氏と協力して開催したこの研究会においては、エイゼンシュテイン研究の井上徹氏、畠山宗明氏、アニメーション研究の土居伸彰を招致して、晩年の『ディズニー論』をはじめとするエイゼンシュテインの著作がはらむ問題について検討することができた。その他には、20世紀はじめのロシア文化史におけるビザンツ的インパクトについて、短いエッセイを発表している。

(4)の課題に関する検討では、「映像の受容における情動の優位」を主張するブライアン・マッスミの著書や、ドゥルーズの絵画・映画論が、『白痴』のナスターシャ・フィリッポヴナの顔について言われる「苦しみ страдание」「同情 сострадание」「情欲 страсть」「情欲 страстность」の情動を検討する際に与えてくれた示唆を挙げなければならない。さらに、アリストテレスが悲劇の根本情動として挙げた「あわれみとおそれ」の20世紀的受容の一事例として、夏目漱石のテク

スト（レッシング『ハンブルグ演劇論』英訳本への書き込みと、『草枕』1906年）を検討し、その成果を二つの研究会において英語と日本語で発表することができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Satoshi BAMBA	4. 巻 24
2. 論文標題 Referring to the Face: Dostoevsky's The Idiot in the History of Physiognomy	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 新潟大学言語文化研究	6. 最初と最後の頁 1-5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 番場俊	4. 巻 49
2. 論文標題 「桑野隆著『20世紀ロシア思想史 宗教・革命・言語』岩波書店、2017年、xi, 248, 10頁」（書評）	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 ロシア語ロシア文学研究	6. 最初と最後の頁 189-197
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 2件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Satoshi BAMBA
2. 発表標題 A Semiotic Approach to the Melodramatic Realism in Dostoevsky's Crime and Punishment
3. 学会等名 ICCEES 10th World Virtual Congress（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 BAMBA Satoshi
2. 発表標題 Referring to the Face: Dostoevsky's The Idiot in the History of Physiognomy
3. 学会等名 XVII Symposium of the International Dostoevsky Society（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Satoshi BAMBA
2. 発表標題 The Rhetoric of Emotions in Soseki and Dostoevsky
3. 学会等名 Towards the Comparative Study of Emotion in Russian, German and Japanese Literature (Mar. 8, 2019, University of Tokyo) (招待講演)
4. 発表年 2018年～2019年

1. 発表者名 番場俊
2. 発表標題 パフチン、エイゼンシュテイン、そして私たち
3. 学会等名 ミニ・シンポジウム「ロシア文化・思想史研究の現在」
4. 発表年 2017年～2018年

1. 発表者名 番場俊
2. 発表標題 小説と美術館の身体メディア論
3. 学会等名 第2回動態論的メディア研究会（招待講演）
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 番場 俊	4. 発行年 2019年
2. 出版社 現代書館	5. 総ページ数 216
3. 書名 顔の世紀 の果てに ドストエフスキー 『白痴』を読み直す	

1. 著者名 沼野 充義、沼野 恭子、平松 潤奈、乗松 亨平	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 306
3. 書名 ロシア文化 55のキーワード	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------